

令和2年東京都輸血状況調査集計結果（概要）

1 調査対象・回答率

(1) 目的

都内の医療機関における血液製剤の使用状況等を調査し、適切な血液製剤使用の推進をしていくための資料とする。

(2) 対象

都内にある病床数20床以上の医療機関：615箇所、令和2年1月～12月を調査対象期間とし、郵送にて実施。回収方法は、郵便、電子メール、ファクシミリのいずれかとした。

(3) 結果

493機関（回答率80.2%）（前年：618機関中477機関 同77.2%）から回答が得られ、うち一般病床100床以上の機関は186機関（同89.9%）であった。

得られた回答は「令和2年輸血状況調査集計結果（概要）」としてまとめるとともに、100床以上の186機関の回答を元に「評価指標」を作成した。

(4) 報告

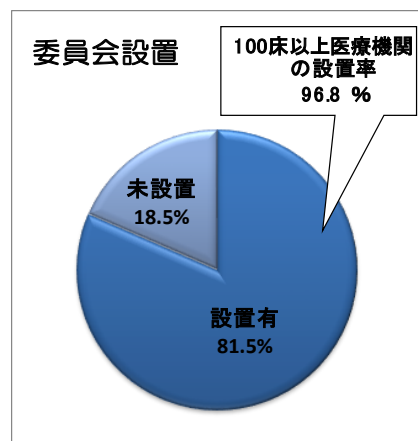
「令和2年輸血状況調査集計結果（概要）」「評価指標」を都ホームページにて掲載するとともに回答のあった全医療機関に送付する。また、100床以上の186機関については、「令和2年血液製剤適正使用推進に向けた評価指標について」（個票）を作成し送付する。

2 集計結果の概要（項目別）

(1) 輸血療法委員会の設置状況

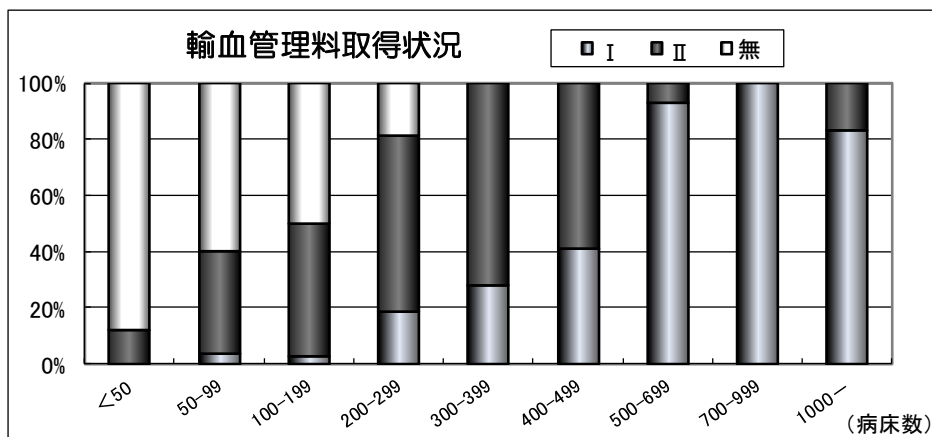
委員会を設置している医療機関は、402機関（81.5%）であった。
（前年386機関 80.9%）

一般病床100床以上の186機関でみると、委員会設置は180機関（96.8%）であった。（前年170機関 97.1%）

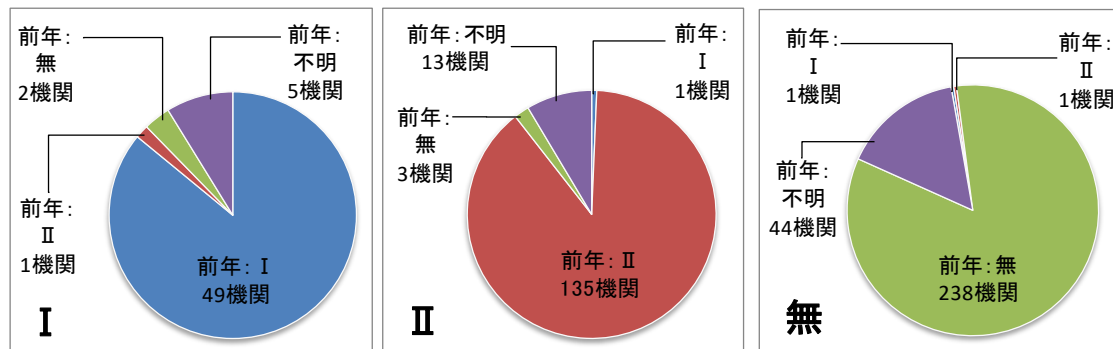


(2) 輸血管理料（Ⅰ・Ⅱ）の取得状況

取得機関は209機関（42.4%）で、内訳はⅠ：57機関、Ⅱ：152機関であった。（前年 194機関 40.7% Ⅰ：52機関、Ⅱ：142機関）

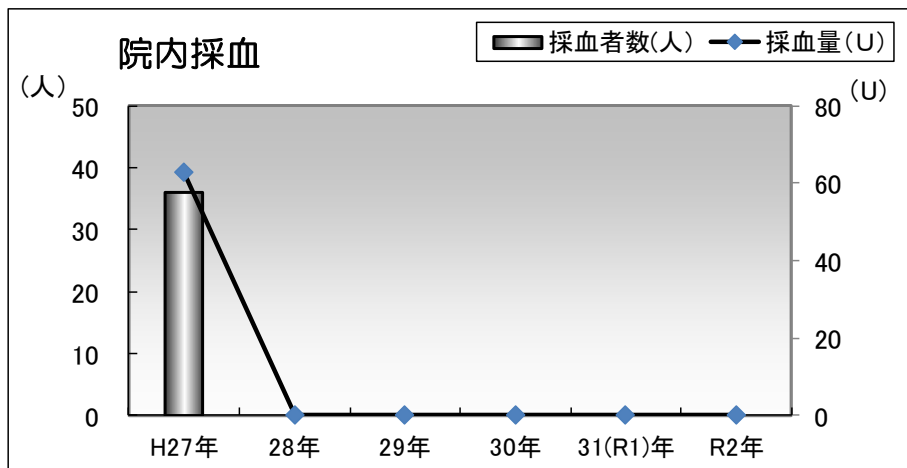


輸血管理料の取得状況の変化（前年対比）



(3) 院内採血の状況

採血者数は0人（前年：0人）、採血量は0U（前年：0U）であり、前年と同様である。



(4) 輸血用血液製剤の使用状況

ア 赤血球製剤の使用量は625,712Uで、前年609,128Uとほぼ横ばいである。

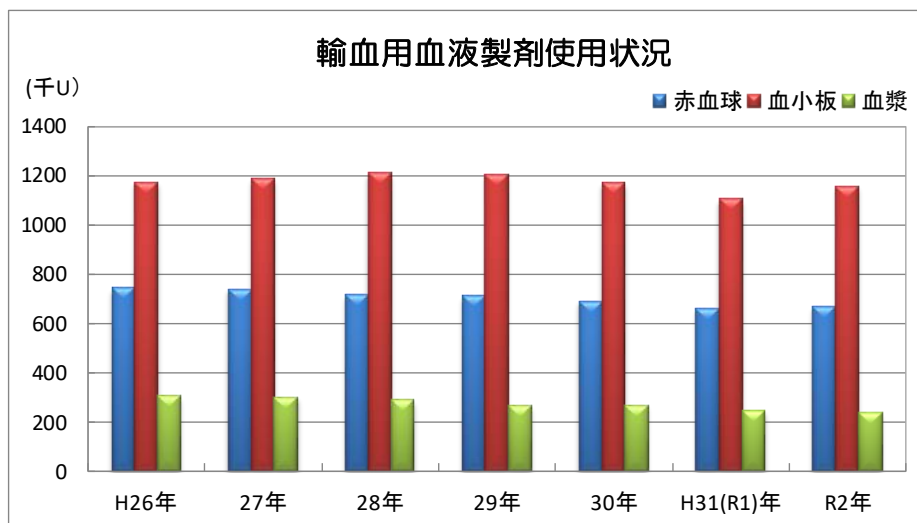
イ 血小板製剤の使用量は1,155,146Uで、前年1,102,868Uとほぼ横ばいである。

ウ 血漿製剤の使用量は235,101Uで、前年243,115Uとほぼ横ばいである。

エ 全血製剤（日赤製）の使用量は10Uで、前年28Uより減少した。

オ 白血球濃厚液の使用は3機関あり、使用対象は顆粒球輸血（1人）、ドナーリンパ球輸注（12人）であった。

カ 同種クリオプレシピテート作製本数は、新鮮凍結血漿（FFP）LR240から38本（5機関）、LR480から1,326本（10機関）であった。

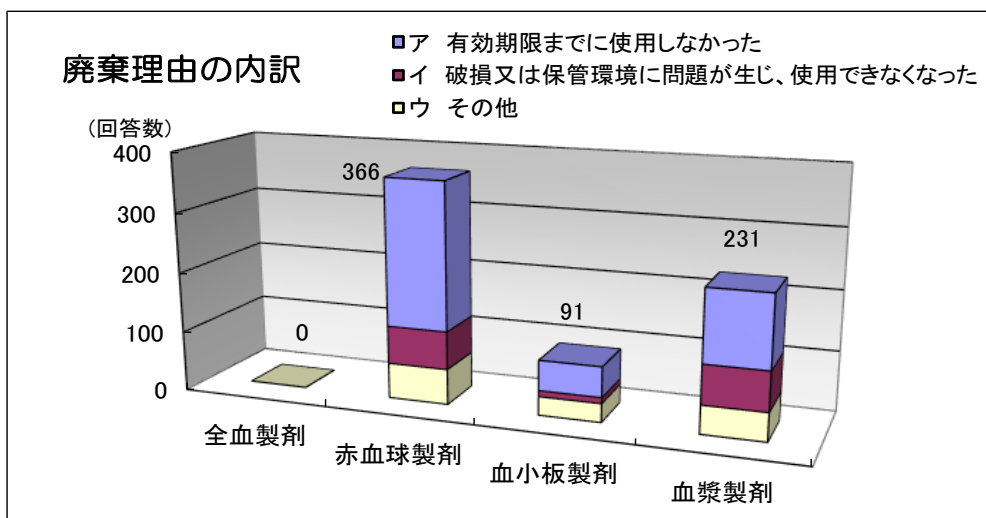
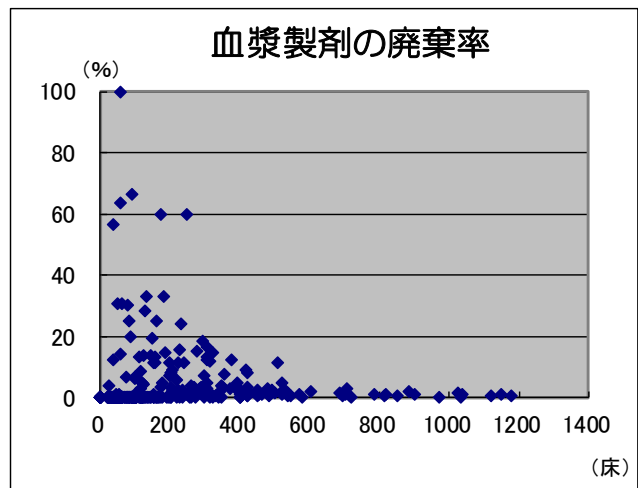
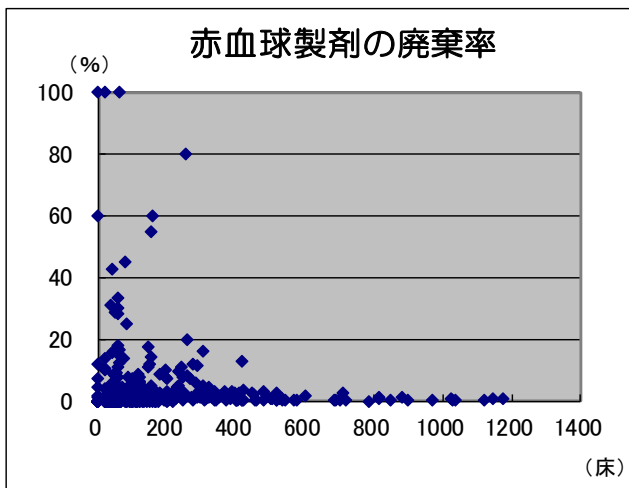
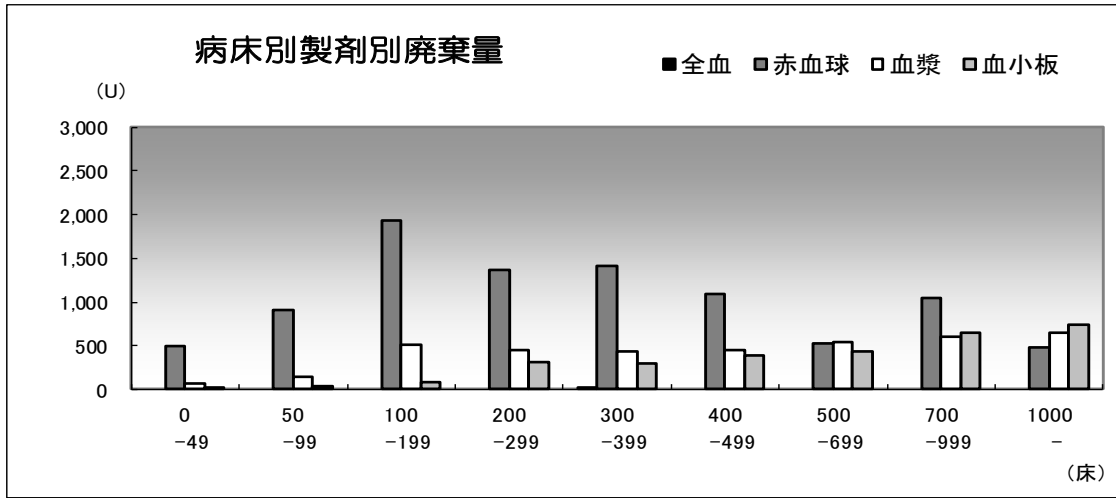


(5) GVHD予防のための放射線照射血液の使用状況

輸血用血液製剤使用病院397機関中の全てが照射血を使用しており、前年の100%と同様である。

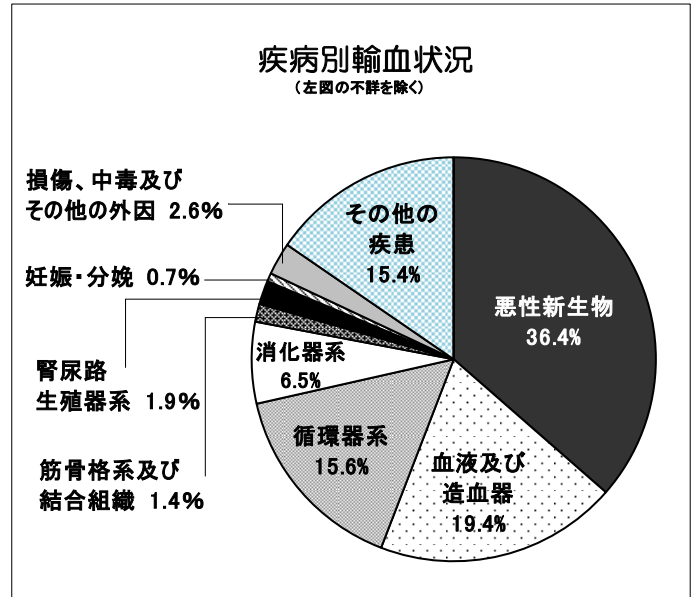
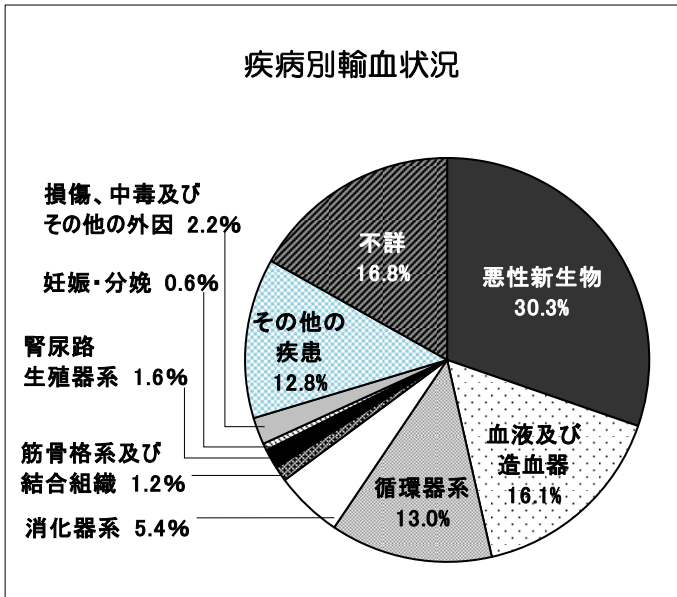
(6) 製剤別購入・廃棄量の状況

- ア 全血製剤の廃棄はなかった。
- イ 赤血球製剤の廃棄率は1.5%(9,255U)で、前年1.6%(9,994U)より減少した。
- ウ 血小板製剤の廃棄率は0.3%(2,962U)で、前年0.3%(3,213U)と横ばいである。
- エ 血漿製剤の廃棄率は1.5%(3,849U)で、前年1.7%(4,575U)より減少した。



(7) 疾病別及び年代別輸血状況

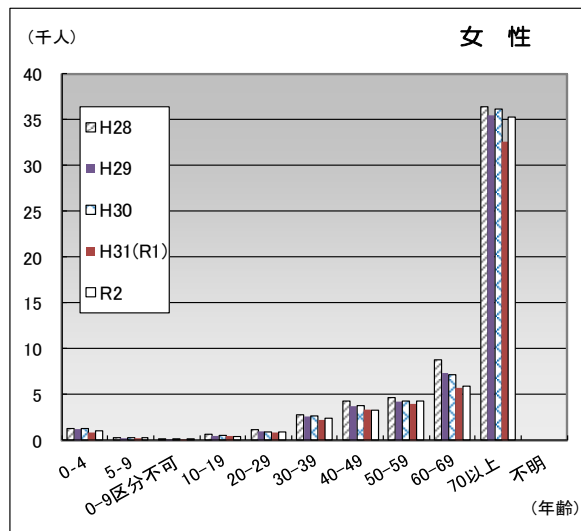
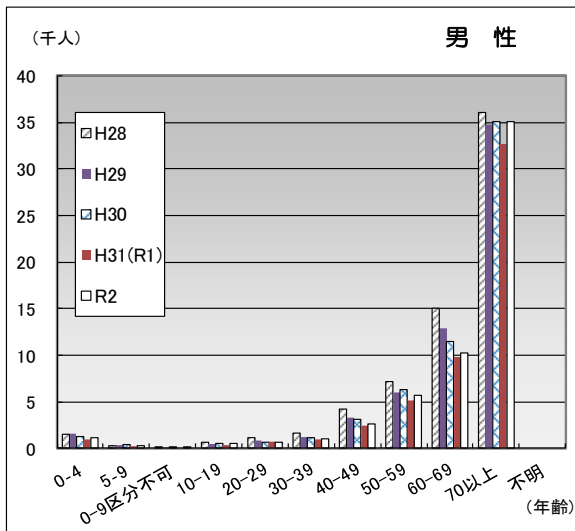
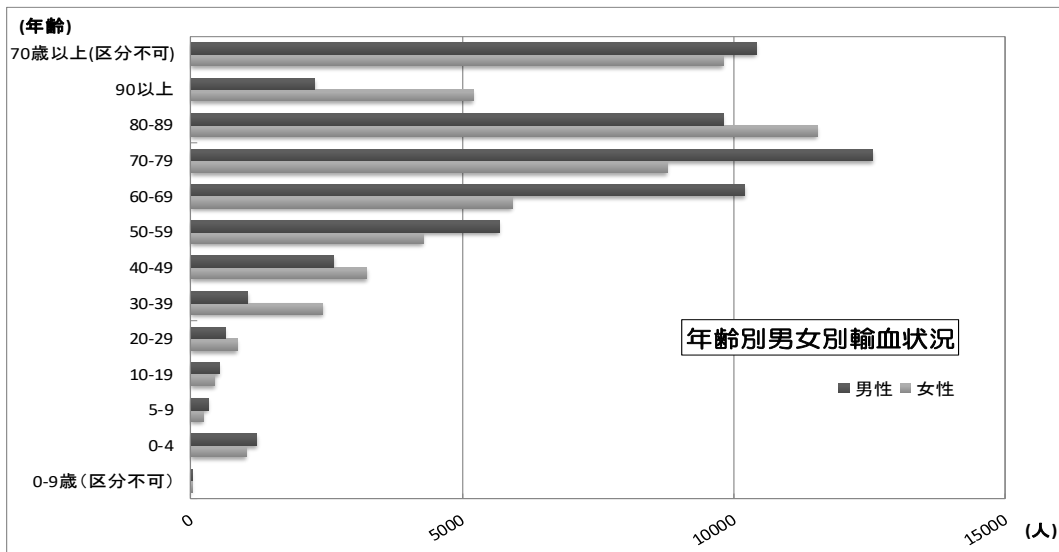
・疾病別では、悪性新生物の治療に全体の36.4%が使用されており、前年(36.4%)と同様である。

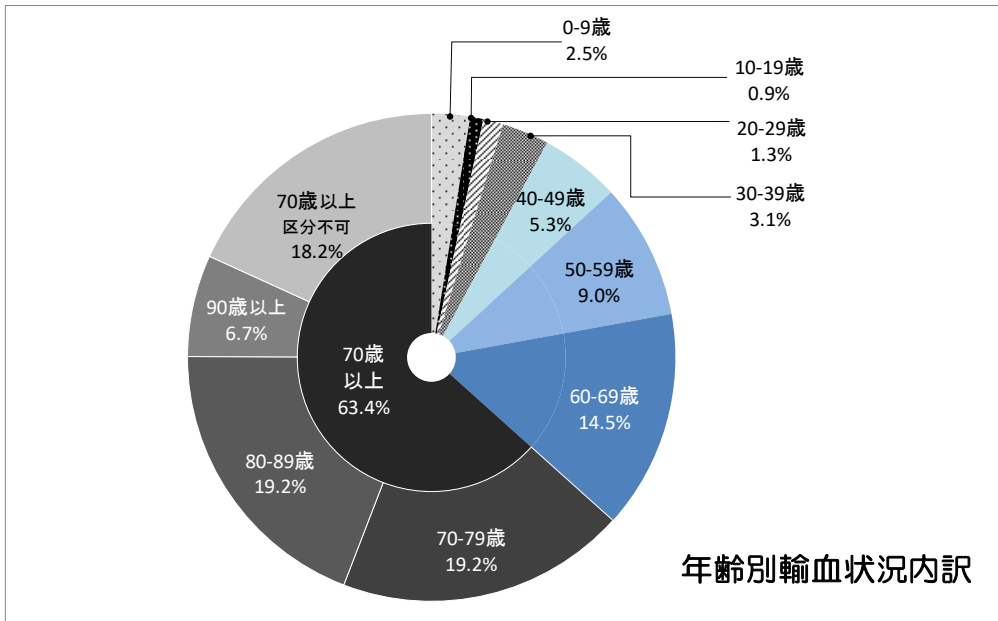


※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100とはならない。

・年代別では、50歳以上の患者への使用が全体人数の86.8%、60歳以上 77.9%、70歳以上 63.4%で、いずれの区分でも前年(50歳以上86.8%、60歳以上 78.1%、70歳以上 63.2%)とほぼ同様である。

※同一人について:30日間の複数回使用は1人としてカウント。平成29年調査より70歳以上も10歳ごとに集計。区分できない年代については「区分不可」として合計値で表記。

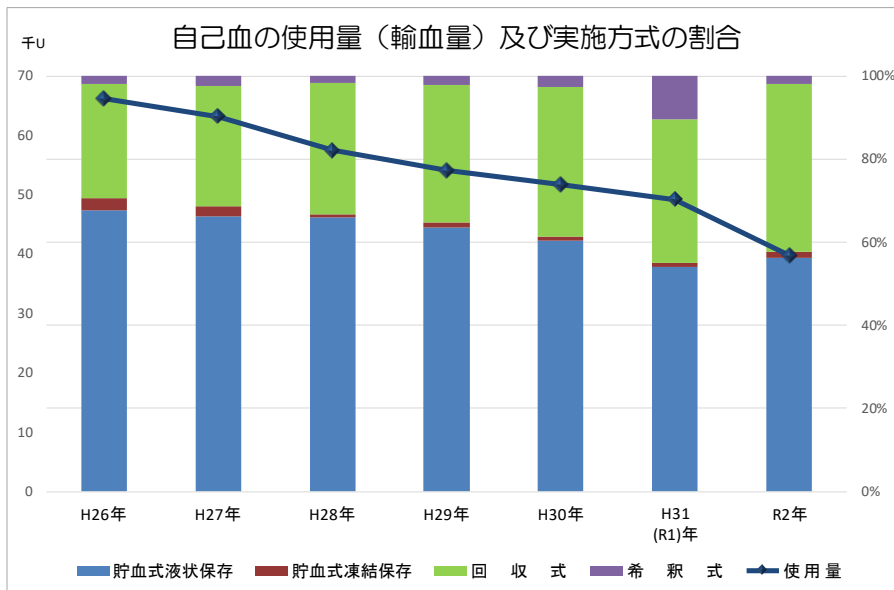




※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100とはならない。

(8) 自己血輸血の状況

自己血の使用量(輸血量)は39,719.3Uで、前年(49,155U)より減少している。

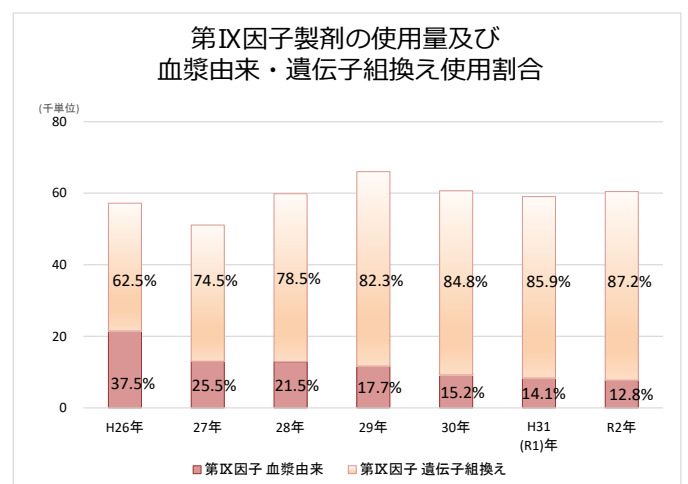
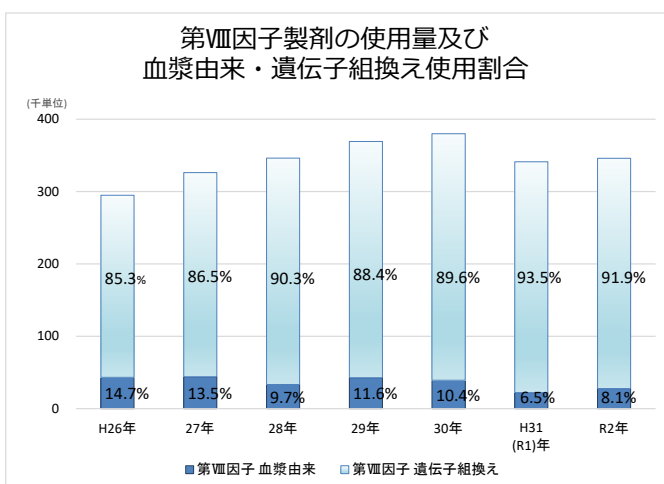
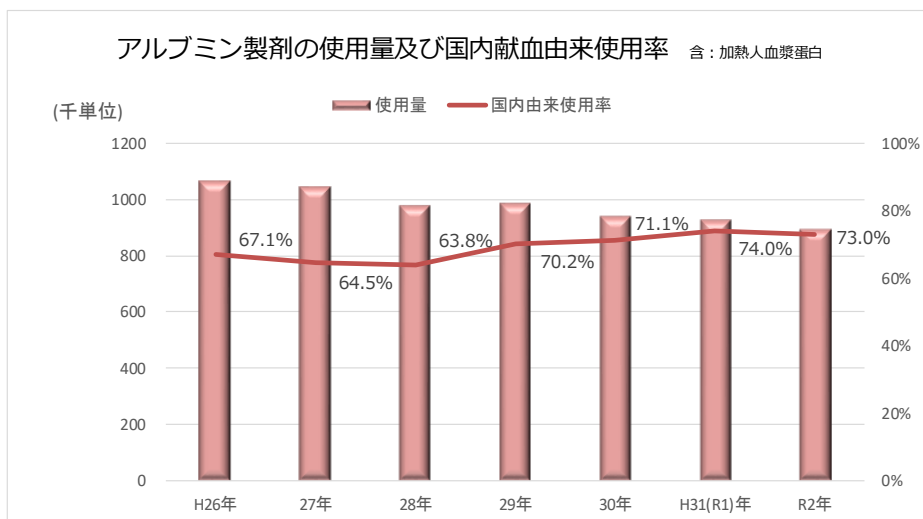
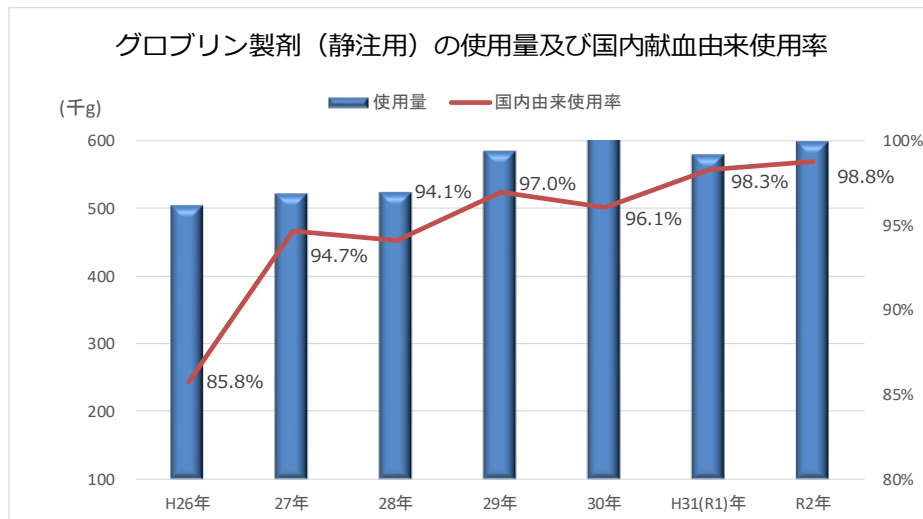


(9) 血漿分画製剤の使用状況

血漿分画製剤（トロンビン及び組織接着剤を含まない。）の使用量は 460,416 本で、前年（464,999.5 本）より減少した。

なお、グロブリン製剤（静注用）の使用本数における国内献血由来製剤の割合は 98.8%（123,503 本）で、前年 98.3%（123,653.7 本）と国内自給率はほぼ同様である。

また、アルブミン製剤（加熱人血漿蛋白を含む。）の使用本数における国内献血由来製剤の割合は、73.0%（168,053 本）で、前年 74.0%（175,614 本）と国内自給率はほぼ同様である。



※機能代替製剤、複合体製剤は除く。1 単位=250IU